

講義メモ (第3回) 子どもの社会学

第3回の講義内容と課題を提示します。課題は、本メモの最後にあります。

皆さんの教育への関心は、「人間形成」にあると第2回のAの解答(コメント)で答えている人が多くいました。

第3回は、「子ども社会学」ということで、「子どもの社会化 (socialization)」つまり人間形成の社会的側面について考察します。

動物の中には、親の庇護や養育がなくても、またそれが短期間で一人前になる種もありますが、人間の場合、長期間の親ないしそれに替わる人の庇護や養育を必要とします。

それがなく幼児期に野生に放置されその後発見された「アベロンの野生児」の例などから、人間の養育なくしては、人間性や道徳性が育たないことが判明しています(授業資料3-1(2-2-1と表示)住田正樹「人間形成と社会化」参照)。人間らしさは、先天的なものでなく、後天的に教育されるものということです。

子どもは、通常どこの国でも、家族で養育される場合が多く、母親の役割と父親の役割の分化もみられます。

それについては、心理学者の河合隼雄の論(授業資料3-3前半、「母性社会日本の永遠の少年」「父親とは何か」)を読んで下さい。

母親は「包み込み」、父親は社会を代表し「切断する」役割を果たすと書かれています。

ただ、男女平等、ジェンダーレスの今の社会の中で、この父と母の役割分担にも揺らぎが生じていると思います。皆さんはどのように考えますか。

さらに、同じ母-子関係、幼児期の子育てでも、その仕方は国や文化によって違うことが文化人類学者の観察によって明らかにされています(授業資料3-3後半 ベフ・ハルミ「日本-文化人類学入門」を参照してください)。

ここで書かれているのは、少し前の日本の子育てですが、今は何か変わっていますか？

母の自分の子どもへの献身は、自分を犠牲にして子どもに尽くす、無償の愛の側面が強いと、私達日本人は考えがちですが、そのことへの再吟味も必要だと思います(それを否定するという意味ではありません)

冊子のIV-8(相手への思いやり、50ページ)にも書きましたが、母親の自己犠牲は幸福をもたらすのでしょうか？(授業資料3-4 村上春樹訳「大きな木」参照)

また、母と娘は、仲がよく、葛藤はないと一般に思われていますが、実態はそうとは限らないということ、写真家の藤原新也は、渋谷で多くの少女たちの写真を撮る中で感じたことを書いています（授業資料3-2）。

母一子関係に関しても、多様な見方が必要だと思います。

子どもの社会化、特に幼児期の家庭における社会化に関しては、母親と父親の役割、母子関係、父子関係、無償の愛、親子の葛藤など多くの問題があります。

またそれは、時代により変化し、国や地域によっても違い、社会化の基礎をそれぞれの家庭で形成し、またその養育の問題を弱い子どもは背負い、トラウマをかかえながら学校に入学してきます。その中で、教師がどのような役割を担うかが問われるわけです。

今回の課題は、家庭での子どもの社会化、つまり家庭（あるいはそれに替わる場所での）養育や教育はどのようにあるべきなのか、現代日本の実態を踏まえて、自分の考えを書きなさいというものです。

「課題 提出」の欄から、200～1000字程度で、武内に送ってください。